

岳 淑芬 (ユェ スウフェン) さん 中華人民共和国 鹿屋市 製造・販売業

タイトル：第二の故郷

私と同年代のほとんどの中国人は、まさに日本のアニメを楽しみながら大人になったと思う。小さい時はいつも意味がわからないアニメの中の曲を歌って、しかもノリノリの気分だった。今でも思い出すと笑いが止まらないです。しかし、アニメの中に描いた日本はあくまで想像の世界で留まり、宮崎駿先生が描いてくれた日本の山河も、青空も、無限に広がる海も、優しいお婆ちゃんたちにも出会ってみたいという気持ちが心の中で思うようになった。いつか実際の日本を自分の目で確かめてみたくなった。高校卒業後に、その願いを叶えるチャンスが訪れたのであった。

当時、外国人の実習生受け入れ事業は中国でブームでした。外の世界を見たくて仕方ない自分がいました。大学への進学を後回しし、恐れも知らず、わくわくの気持ちで日本へ飛び立った。

2007年の12月、私は実習生として鹿児島県の鹿屋市に来まして、3年間の実習生活が始まりました。鹿屋に来た時、日本語がほとんど喋れなく、不安もあったけど、幸い環境に恵まれて、社長と奥さんは自分のことを娘のように優しく可愛がってくれた。周りの日本人の方たちも優しく接してくれた。暇の時間に頑張って勉強し、日本語能力試験の1級を合格することができ、とても充実して幸せな3年間だった。

中国に帰ってから大学への進学を考え、せっかく勉強した日本語を無駄にしたくない気持ちもあった。社長から「大学に行きたいなら、応援するから。日本に留学に来なさい」と強く自分の背中を押してくれた。その一言で、私は日本の大学に進学することを決意した。

2012年の9月、私は留学生として鹿児島国際大学に入学し、再び、私は鹿児島の大地へ戻った。

日本に滞在した経験があったため、自然と、同じ時期に来た留学生たちの「お姉さん」役になってしまった。皆素直でいい子たちばかり、いつも授業をともに出席した。でも、前回の来日目的とは違い、留学生としての一番重要な任務は勉強することである。数えきれない専門用語が耳を襲撃し、理解するのに大変苦労した。単位を落とさないため、毎日の授業がまるで自分との戦いだった。それでも、大学生って幸せだと思う。勉強する以外に、自由時間がたっぷりあるからです。時には友達と遊びに出掛けて、大自然を満喫することもあった。

卒業した後、恩返ししたい気持ちで、私は鹿屋に戻り、実習生の時と同じ会社に入社した。実習生たちの面倒を見ながら、会社経営に携わり、少しずつではありますが、成長した自分はここに居た。周りの日本人は「鹿屋は日本で一番田舎なところですよ」とおっしゃいますけど、田舎だからいいです。東京みたいな大都市はもちろん素晴らしいけど、緊張感で溢れそう、自分みたいなマイペースの性格には暮らすことが無理でしょう。かえって鹿屋の方が

落ち着く。大自然に囲まれ、親切な人たちが居て、おいしいお料理もお腹一杯食べられて…
こんな幸せな町は最高だと思う。

だから、鹿屋は自分にとって「第二の故郷」である。

これからも、鹿屋の魅力をたくさんの方たちに紹介し、貿易を通じて、少しでも鹿屋市の発展に貢献したく、中日間の架け橋のような存在になりたいです。